

[Kaffeeklatsch] 9

ソウルに終わらないコーヒーブームの「あつさ」を

広島修道大学教授 中根 光 敏



聖水洞大林倉庫ギャラリーの1階店内

2020年3月7日からソウル調査へ出る予定だったのが前日に勤務先から出張禁止となって断念してから、ずいぶん経ってしまった。COVID-19 pandemicで休止していた海外調査をようやく始動させ、2025年8月26日から一週間、まずはソウルへ。

久しぶりのソウルということで、出発前からあちこち行ってみたくて期待を膨らませていたのだが、あつという間に滞在期間が過ぎてしまい、行けなかったところも多かった。今夏の暑さが異常なのはソウルでも同じだったのである。日本の梅雨時のように湿気が高い上に猛暑

で、日中、歩き回ることがかなわなかった。さらに、道路が混み合っていて、タクシーを使った移動に時間がかかり過ぎて、地下鉄での移動が多くなったことも、想定外だった。

とにかく「暑い」ソウルで、「あつさ」を感じたのは気温だけでなくCOVID-19 pandemicを経ても終わらないコーヒーブームだった。ブームの発火点・弘大（ホンデ）では、相変わらずカフェの入れ替わりが激しく、多くの新しいカフェができていた。とりわけパンを売りにしたカフェではどこも行列ができていて、待ち時間を考えるととても入ってみようと思えなかったくらいだ。

ブームの最新は、乙支路（ウルチロ）から聖水洞（ソンスドン）へと移り、街の様子も変わっていた。乙支路はカフェだけでなく、新しい飲食店街に深夜遅くまで若者が集う街に変貌していた。乙支路よりも大きく変貌していたのは、今やブームの最先端となった聖水洞である。高級ブランド店がいくつも出店し、pandemic前の狎鷗亭（アックジョン）ロデオや新沙洞（シンサドン）カロスキルのようになっている——ただ、ロデオとカロスキルの衰退は激しかった。乙支路以上に、聖水洞は、コーヒーブームによって、街自体が大きく変貌していたのである。

ランドマークである聖水洞大林倉庫（テリムチャンゴ）ギャラリーは巨大なカフェであるが、1階中央にパンが陳列され、レジ前にはパンを抱えた客たちが長蛇の列を作っていた。大林倉庫ギャラリーを中心として工場・倉庫街からカフェの街へと大きく変貌した聖水洞全体を見てまわるには、とても時間が足らなかったけれども、ソウルに終わらないコーヒーブームの「あつさ」を体感できた2025年の夏旅となり、また続報をお届けしたいと考えている。

【付記】本稿は2025年度広島修道大学調査研究費（ひろみら領域研究）を受けて行っている「グローバル化と社会変容」と題した共同研究の成果の一部である。